

「求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。
叩きなさい。そうすれば、開かれる」(マタイによる福音書7章7節)



東北学院院長・学長(宗教センター所長) 大西 晴樹

学院創立138年目にあたる2024年度は、今のところ、コロナ禍からのほぼ全面的な回復の年といえるのではないだろうか。学院設置の各校の礼拝を見ても、コロナ禍以前の状態に戻りつつある。

そのような現況の中で、特筆すべきは、大学で行われているTGCF(東北学院クリスチャン・フェローシップ)の活動である。原田浩司宗教センター主任、佐藤由子宗教センターチャプレンの指導の下に、30人、40人と纏まった数の学生たちが自主的に活動が続けている。TGCFはコロナ禍の中で産声を上げ、細々と始まったが、今や「点」から「線」へと成長している。これは、これまでの学院における礼拝中心の宗教活動では考えられなかったことなのである。

TGCFのプログラムを見てみよう。① Music Service。学生がワーシップソングを自らの楽器で奏で、賛美の声を上げ、メッセージを語る。学校礼拝と異なり

アットホームな礼拝である。② 73 LUNCH。73とは宗教センターの別室が7号館の3階にあることから命名された。そこに学生たちが昼食を持ち寄り、ほぼ毎週木曜日に昼食をともにする。そして月に一度、土樋キャンパスホーイ記念館1階のコラトリエで開催される③ English Caféである。

お気づきのことと思われるが、プログラム名はすべて英語である。これらのプログラムには、在仙の外国人宣教師たちが寄り添い、英語と日本語で学生たちをリードする。歌声のみならず、聖書の学びあり、トークあり、祈りあり、恥ずかしさあり、苦労あり、笑いありである。TGCFは、英語のみならず、神と異文化との直接的な出会いと自己表現の場にもなっている。遠く138年前の仙台神学校においても、同じような光景が繰り広げられていたのではないだろうか。その意味においてはTGCFは「リバイバル」なのである。



① Music Service



② 73 Lunch



③ English Cafe



経営学部2年 松田 永遠

TGCF（東北学院クリスチャンフェローシップ）が発足してから1年以上が経ちました。僕はいくつかの活動で企画者として携わせていただき、多くの楽しく刺激的な経験をすることができました。

TGCFのこれまでやってきた主な活動は、English cafe や Music service、学生交流イベントなどがあります。これらの活動一つ一つを行うにあたって、学生が企画者となり、どのようにしたら学生が主体的に基督教活動に取り組むことができるかを考え、ミーティングや準備を行ってきました。その中で僕が特に印象的だった活動は English cafe です。様々な国籍、学部、学年の人が集まり英語を使って交流するという企画です。単に英語力やコミュニケーションスキルを磨くためという以上に、新しい「人」や「文化」との出会いを楽しむ機会として多くの人が参加してくださいました。

TGCFにはこのように、学生が楽しんで主体的に基督教活動に取り組むことができる環境があります。この活動をより多くの人に知ってもらい、学生の内面の養いや成長の機会として生かされていくことを願っています。

子ども達の呟きに耳を傾けて

幼稚園教諭 柏木 真理子

「神様のこと、大好きと思う。」

これは年中組のA男君に神様のことをどんなふうに思う？と尋ねた時に、笑顔いっぱいの表情と共に返ってきた言葉です。

また、B男君は、「パパとママが（元気に）お仕事にいくように（と祈る）」と話してくれました。お祈りしていると嬉しい気持ちになるそうです。

C子ちゃんは「神様はどんな所が好きですか？」と聞いてみたい、また、D男君は「神様って何してるのかなーって思う」と教えてくれました。神様とお友達と言ってはいけないかもしれませんが、そのくらい身近な存在として感じているからこそその言葉かと思えます。

また、E子ちゃんは「神様に、咲かせてくれてありがとうございます。お米とか。」（クラスで育てているバケツ稲のこと）を話してくれました。神様が命を与え、大きくして下さることを感謝する心も育っていることを嬉しく思います。これからも子どもの小さな呟きに耳を傾け、共に考えたり、喜んだりしながら、祈りの時を一緒に過ごしていきたいと思っています。



讃美歌『ぱらぱらおちる』

ぱらぱらおちる あめよ あめよ
 ぱらぱらぱらと なぜおちる
 かわいたつちを やわらかにして
 きれいなはなを さかすため
 きらきらひかる ほしよ ほしよ
 きらきらきらと なぜひかる
 たびするひとが くらいよにも
 まよわずみちを いけるため
 ちゅんちゅんうたう とりよ とりよ
 ちゅんちゅんちゅんと なぜうたう
 きれいなうたで せかいのひとに
 みかみのあいを しらすため

キリスト教保育連盟発行「幼児さんびか」より転載

この讃美歌は年中たんぽぽ組の子どもたちが好きな讃美歌です。普段、礼拝などで「雨も神様からの大切な恵み」という話を聞いている子ども達は、雨が降ると「お花や草が喜ぶね。」と笑顔を見せています。外で遊べないけれど草花が喜ぶからまあいいか！と庭を見つめているのでした。この讃美歌を初めて歌った日の礼拝で「なぜ星は光ると思う？」と聞いたら「暗いと見えなくて困るから光る」「きれいで嬉しくなるから」「星が光ると明るくなって夜でも歩くとき道路が見えるように」と真っ直ぐで純粋な答えが返ってきました。私たち大人も子ども達のようにきれいな優しい心で物事を見つめられる、感じられる保育者でありたいと思います。

初めてキリスト教に触れて思うこと

東北学院中学校 2年 佐藤 寿々

本校に入学するまではキリスト教に縁のない生活をしてきました。キリスト教とは一体どんな宗教なのか、毎日の礼拝とはどんな雰囲気なのか不安や緊張などたくさんの感情でいっぱいでした。初めて礼拝に参加したとき、先生が聖書のどこの箇所を読んでいるかすらわからず、毎日違う箇所やそのお話、賛美歌などついていくのがたいへんでした。



前列左から3人目

しかし毎日礼拝を重ねていくうちに段々と礼拝についていけるようになり、気がつけば毎日進んでゆく聖書のお話が少し礼拝の楽しみになっていました。また先生によって聖書の箇所の解釈が違うのも礼拝ならではのなかなと思います。毎朝礼拝から始まることで心も体も落ち着く事ができ、よりよい学びができると感じています。また礼拝でのお話や聖書の授業で学んだことが少しずつ心の支えや考え方、捉え方など根付いて行くのではないかなと思います。これからも毎朝礼拝から始まる一日一日を大切にして、学校生活を歩んで行きたいと思います。

礼拝を土台に成長

東北学院高等学校 1年 中村 香穂

私にとって礼拝とは心を穏やかにし、その日も生きていることを改めて実感し、神様に感謝する時間です。毎朝学校でする礼拝では、先生方のお話を聞き聖書について学んだり、日頃の生活を見直したりとても有意義な時間だと感じます。



後列左

私は中学校もキリスト教の学校だったこともあり、中学生の時から毎日礼拝をしていました。毎日の礼拝を通して新たな考え方や感じ方になっていくのを感じていました。これからも、皆で神様に感謝できる礼拝という時間を大切に、生活していきたいです。また、顔も名前も知らない他の人のためにも祈ることのできるような人になりたいです。高校三年間で新たな仲間と毎朝の礼拝を通してたくさん成長できることがとても楽しみです。

イースター礼拝の司会をしてみよう

東北学院榴ヶ岡高等学校 3年 齋藤 樹



私は宗教委員としてイースター礼拝の司会を務めました。普段の礼拝では、先生と牧師が司会と説教を行い、生徒がそれを聞く形式です。そのため、生徒である私が司会を務めることは非常に貴重で特別な経験でした。



実際に司会を務めて感じたことは、牧師の方々が非常に礼儀を心得ているということです。礼拝中、司会から牧師にバトンタッチする際にお辞儀をすることはもちろん、礼拝前後にも「お願いします」や「本日はありがとうございました」などの言葉と共に深くお辞儀をされる姿をみて、礼儀の大切さにも改めて身をもって感じました。

このような普段気づく機会のないことも、実際に牧師の方と直接交流することで感じる事ができ、緊張しましたがとても良い経験になりました。またこのような機会があれば、今回の経験を生かしつつ、率先して取り組んでいきたいと思っています。

初めてキリスト教に触れて思うこと

東北学院榴ヶ岡高等学校 3年 澤口 日向子

入学前、『キリスト教』と聞いても何ひとつピンとくるものはありませんでした。よく耳にする単語のほずなのにイメージ出来るものはイエス・キリスト、聖書、クリスマス…といった抽象的なものばかりでした。そんな不明瞭な状態で参加した初めての榴ヶ岡での聖書の授業は、多くの衝撃に溢れていました。西暦はイエスの誕生から数えられているということ、聖書は世界で最も売れた本であるということ、そして何よりキリスト教は『愛の精神』を重んじる宗教であるということ。キリスト教が昔から多くの人々の心の拠り所になってきた理由はこの愛の精神にあるからでしょう。このことは榴ヶ岡高校に入学し、キリスト教教育を受けたからこそ知ることのできた大きな発見でした。



このような身近なようで何も知らなかった世界を学んでいくことは、未知との出会いに溢れていてとても新鮮です。私にとってキリスト教とは未だ身近なものとは言えません。しかしこの先の人生において大きな壁が立ちはだかった時、キリスト教が心の拠り所として私を助けてくれるかもしれないと思います。

大学礼拝の魅力は？

2023年度学長招待学生懇談会に参加した情報学部データサイエンス学科(榴ヶ岡高校出身)の3名に聞きました！



2023年度学長招待学生懇談会

Interview

1

福田 彩葉

Iroha Fukuda

キリスト教を学ぶということは、生きる上での手がかりを得ることの一つだと私は考えています。とてつもなく悲しいこと、打ちひしがれて前を向けなくなる、こと、悩み、考えても、どうしようもないような大きな出来事が、人生には何度か訪れます。大きな災害や大切な家族との別れなど、大きく暗い闇に飲み込まれ、目を、心を、固く閉じることしかできない状況があります。

普段は、授業や礼拝を通して何気なく触れている聖句、または先生や牧師さんの言葉ですが、その教えや言葉をふと思い出したとき、その意味に気づいたとき、身動きの取れない状況から抜け出す糸口になることがあると信じています。

もうすぐ卒園という頃、東日本大震災が起こりました。幼稚園で歌っていた讃美歌を、私がよく歌っていたということを両親から聞きました。大きな揺れが続き、いつもと異なる状況に対する不安を、讃美歌を歌うことで和らげていたのかもしれませんが。どのような状況でも前に進まなければならない、生きなければならない私たちにとって、あらゆる言葉や経験がいつどこで助けになるかわかりません。幼稚園、高校、大学で得たキリスト教の学びはとても貴重であり、残された学生生活の中でも積極的に学んでいきたいと思います。

レディ・カレ♪囲碁部特集



Interview

2

浅野 圭亮

Keisuke Asano

「TGU情報リテラシー教室」
今年2月に設立。仙台市の
小学校を対象に活動中。



私にとってキリスト教とは、日々の生活における指針であり、心の支えです。高校時代から毎日礼拝に出席し、「聖書」という授業を通じてキリスト教の教えを学ぶことができました。現在も週に数回大学礼拝に出席し、心を落ち着かせ、聖書を読み、神を讃美しています。

礼拝の時間は、日常の忙しさや悩みから解放され、自分自身と向き合う大切なひとときです。

特に、東北学院の建学の精神である「隣人への愛」を実践することは、私にとってキリスト教の核心であり、これに基づいて他者を理解し、共感することを意識しています。この教えは私の行動の基盤であり、他者との関係や自己成長を促すものです。

私が特に大切にしている聖句は「隣人を自分のように愛しなさい」(マルコによる福音書 12章 31節)であり、この言葉は私の日常生活の中で常に心に留めています。キリスト教の教えは、助け合い共に生きることの大切さを教えてくれ、私の人生を豊かにしてくれるものです。

Interview

3

佐藤 尚輝

Naoki Sato

私が礼拝に通う第一の理由は、落ち着いて過ごす時間を確保するためです。大学生は、スケジュールリングの自由度が高い分、礼拝という決められた、かつ、落ち着く時間が、毎日固定された時間にあることは大切だと思います。

第二に、礼拝に通っていると、聖書や説教者から今の自分にぴったりの言葉を受け取ることができます。習慣になると出会えるものがあると、礼拝を通して実感できます。日常で様々な経験をする中、同じことを続けることは自分の精神状態の変化にも気づくことができます。私は時折、今日は礼拝に出席している時間がないと思うことがあります。こうした時、自分のキャパシティを受け止め、礼拝に行って休息に専念します。

礼拝出席の意義を、最近はこのように考えておりますが、もともと礼拝に行っていた理由は無料でパイプオルガンを聴くことができるからでした。これは、五橋キャンパスの中で数少ない文化的な要素だと思います。



一緒にワンダーフォーゲルしよう！



Information

スペシャルミュージックサービスのお知らせ

〈東北学院大学宗教部主催 秋季特別伝道礼拝企画〉

日時：10月9日(水) 17時半～19時

場所：五橋キャンパス 押川記念ホール

札幌にあるカナン・プレイズ・チャーチ主任牧師でワーシップリーダーとして多方面に活動している長沢崇史牧師とTGCFによる賛美集会です。

どなたでもご来場いただけます。
ぜひお越しください！

長沢崇史牧師
×
TGCF

「いのち ひかり あい」第8号

発行：東北学院宗教センター

発行責任者：宗教センター主任 原田 浩司

〒984-8588 仙台市若林区清水小路3-1

TEL：022-354-8310

Email：c.center@mail.tohoku-gakuin.ac.jp



宗教センターHP